

日本婦道記

尾花川

山本周五郎

青空文庫

「そういう高価なものは困りますよ、そちらの鮒ふなを貰つておきましよう」

書庫へ本を取りにいった戻りにふとそういう妻の声をきいて、
太宰だざいは廊下の端にたちどまつた。相手はいつも舟で小魚を売りに
来る弥五やごという老漁夫らしい、「そんなことを仰おつしやらないで買
つて下さいまし、こちらの旦那さまにあがつて頂こうと思つて、
ほかの家の前を素通りして持つて来たんですから」諄くどくど々とそう
いうのが聞えた。

「とにかく鮒なら貰います、よかつたらいつもほど置いていらつしやい」

「さようでございますか、あてにして来たんですがな、少しでも買つて頂きたいんですが、値段だつてこちらさまで高いと仰しやるほどじゃあございませんでしよう」

老人はなおぶつぶつ云っていたが、間もなく、魚籠びくを担いで厨くりやぐち

口の方から出て来た。そこから庭つづきに湖へ棧橋かたあしが架け出してある。その脇の枯蘆みぎわの汀にもやっている老人の小舟がみえた。

「おい弥五」太宰は廊下から呼びかけた、「今日はなにを持って来たのだ」

「ああ旦那さま」老人はびっくりして頬冠りをとった、「……なに珍らしくひがいが獲とれたものですからね、御好物だと聞いたもので持ってあがったんですが」

「それは久しぶりだな、どのくらいある」

「ほんの四五十もございますかね」

「みんな貰っておこう」妻のほうへ聞えるようにかれはそう云った、「……それから弥五、おまえ正月の鴨かもを持って来なかつたようだがどうしたのだ」

「へえ、それはその、なんです」

老人は困ったような顔つきで、もじもじと厨口のほうを見やつた。太宰はやっぱりそうかという気持で思わず声が高くなつた。

「約束したら持つて来なければだめではないか、もう手にはいるあてはないのか」

「あての無いこともございませんが、なにしろもう数が少のうございますでね」

「四五日うちに客があるからなんとか心配して呉くれ、骨折り賃はだすから、いいか」

そう云つて太宰は自分の居間へ戻つた。

この屋敷には珍らしく客の無い日だった。一人だけ鹿島かしま金之助という宇都宮藩うつのみやはんの青年がいるけれど、これは四十日ほどまえからの滞在でかくべつ接待の必要もない、こういうときこそゆつくり本も読もうと思ひ、久方ぶりに書庫から二三持ちだして来たの

だが、さて机に向かつてみると気持ちのおちつきが悪かった。……
厨でことわったひがいをわざと呼び止めて買った自分の態度も、
むろん不愉快であるが、このひと月あまりのうちにとことなく変
つてきた妻の挙措きよそが、あれこれと新らしく思い返されて心が重く
なるのだった。

かれの本姓は戸田氏である、近江おうみのくに膳所藩ぜんぜの老臣戸田五左
衛門の五男に生れ、三十歳のとき園城寺家おんじょうじの有司池田都維那ゆうしの
家に養嗣子ししとしてはいった。妻の幸子はそのとき三十二歳だった、
かの女も彦根藩の医師飯島三太夫さんだゆうのむすめで、幼少のとき池田
家の養女となり太宰を婿に迎えたのである。……幸子は肥りじしふと
のゆったりとしたからだつきで、口数の少ない、はきはきとした

なかに温かい包容力をもった婦人だった。年齢からいっても気性からいっても、老臣の五男に育った太宰には初めから姉という感じ、幸子がどうつとめても、否つとめればつとめるほど、かれは言葉ではあらわしようのない一種の圧迫を受けるばかりだった。池田都維那は間もなく園城寺家を致仕し、大津尾花川の琵琶湖に面した土地に屋敷を建て、多くの田地山林を買って隠棲したが、いくばくもなく世を去ったので、その遺産はすべて太宰の継ぐところとなった。かれは養父の死後ほどなく姓を河瀬と更え、聖護院宮に仕えてその有司となったけれど、世上のありさまはその頃からにわかに変貌しはじめ、頻々たる異国船の渡来とともに、国の隅々からわきたつ「尊王攘夷」の声は、かれをも

宮家の一有司たる位置から奮起させずにはおかなくなっていた。

太宰が国事に奔走するようになる、尾花川の家にもしたがって客の往来が繁くなつた。そこは市街から離れているし、琵琶湖の水を前に如意によいヶ岳たけを背にした閑寂なところで、「采釣亭さいちようてい」となづける屋敷構えも広かつたから、同志の会合にもうつつけだし、幕吏の追捕をのがれる者にはいい隠れ場所だつた。……幸子は良人おととのころざしをよく理解した、家政をあずかっているかの女は、良人が同志へ貢ぐかなり多額な金もこころよく出したし、客があればいつでもできるだけ篤あつくもてなした。肥えた膚の白い、ゆつたりとしたからだつきと、いかにも温かそうな微笑を湛えた面ざしと、口数の少ない、けれど心のこもつた接待、と……幸子

のすべてが、尾花川の家をおとずれる人々の心をとらえた。「こ
こへ来るとわが家へ帰ったようだ」客たちはよくそう云った、
「まったく百日の労苦が一夜で癒いやされる」

二

こうして往来する志士たちから敬愛と感謝の的になっていた幸
子が、この頃どことなくようすが変つてきたのである、客があつ
て酒宴になつても以前のように下物の品数かぶつがそろわない、豊かな
琵琶湖の鮮をひかえているのに、焼き鮎とか干魚とか漬菜などと
いう質素なものが多くなつた。酒も少しまわつたかと思うと黙つ

て食事にしてしまおう、「まだ飯には早い」と云えば、「あいにくもう御酒がきれまして」と答えはきまっていた。……この数年は出費の嵩む生活がつづいた、けれども亡父の遺して呉れた資産に比べればたかの知れたものだし、尊王倒幕の事のためには、その最後の一銭まで抛つ覚悟ができていた、むろん妻もそれは承知の筈だったのに、どうしてにわかになんかそう変ったのか。客の接待だけではない、家常茶飯すべてのことが眼立ってつましくなった、まえから幸子は召使たちといっしょに食事をする習わしだったが、近頃の菜はおもに焼き味噌と香の物だという、……つましいというよりも寧ろ吝嗇にちかい変り方である、太宰にはそういう妻の気持がまったくわからなくなっていた。

机に向かつて書物を披ひらいたまま惘然もうぜんとももの思いに耽ふけつていた太宰は、「お客来でございます」という妻の声でわれに返った、「泉さまがお二人ほど御同伴でおみえになりました」かれは「よし」と頷うなずいたがすぐに妻を呼びとめ、「先刻のひがいで酒の支度をしましてまいれ」そう云つて立ちあがつた。

客は泉いずみ仙介せんすけという越後えちごのくに村松藩の志士で、かれとは最も親しく往来しているひとりだった。

「久きゆう潤かつのみやげに同志をひきあわせよう」仙介は日焦ひやけのした顔をふり向け、太宰が坐るのを待ちかねたように云つた、「こちらは讃岐さぬきの井上文郁、それに長谷川秀之進だ」

「長谷川という」と会釈が済んでから太宰はそう訊たずねた、「長谷

川宗右衛門どのとなにかご血縁にでもお当りですか」

「宗右衛門の倅せがれです」秀之進とななる青年はふと眼を伏せるようにした、「……うちあけていとうと庶子なのですが」

宗右衛門長谷川秀驥ひできは高松藩でも指おりの勤皇家である、その秀驥の子と聞いて太宰はひじょうに興そそを唆そそられた。泉仙介はすぐ要談をはじめた、それは若狭わかさの梅田源次郎らを中心に同志を糾合し、彦根城を奪取して倒幕の義兵をあげようというのである。高松藩でも長谷川秀驥が周旋しゆせんしているし、できるなら水戸の藤田東湖とうこを通じて齊昭なりあき侯まで動かす計画だという、……尊王攘夷の論がようやく攘夷倒幕という直論に向かつてきた現在、誰かがなにごとかを事実において示さなければ道は打開しない、それは太宰

にもよくわかった。けれどもいきなり彦根城奪取ということには賛同できなかつた、それでながいことかなり烈しい議論が応酬されたが、やがて灯がはいり、酒肴しゅこうがはこばれたので、主客はひとまず論諍ろんそうをうち切つてくつろいだ。

「このまえ来たときにいたあの宇都宮の若者はどうしたかね」盃さかずきを手にしたとき泉仙介がふと思いだしたように云つた、「……脱藩の罪で追われているとかいつた、鹿島なにがしとかいう名だつたと思うが」

「まだいるよ」太宰もそう云われて思いだした、「話にまぎれて忘れていた、呼んで諸君にもおひきあわせしよう」

すぐに離れのほうにいる鹿島金之助を呼びよせた。井上と長谷

川は初対面なので互いに名乗りあい、賑やかに盃がまわりだした。……そうして半刻も経つたであろうか、長谷川秀之進がちよつと改まった調子で鹿島金之助に呼びかけた。

「あんたは宇都宮だそうだが、岡田真吾をご存じですか」

「ええ知っています」金之助は眩しそうな眼をした、「……よく議論をしました、あんな酒好きな男もありません、わたしも呑みますけれども、あの男は」

「いや酒なんかどつちでもいい」秀之進はきゅつと眉を寄せた、

「それでは松本※太郎はどうです、やっぱり知己ですか」

「知己というほどではありませんが」

なんのためにそんなことを諄く諷くのかわからなかった。太宰

はそれよりもさつきから酒がきれているので、またいつものように黙って食事にするつもりかと思ひ、もしそうなら今夜こそ云わなければならぬと少し苛いら々いらしていた。するとふいに秀之進が「ご主人」と改まった調子で呼びかけた。

「この男はいけません」秀之進は指で金之助をさし示しながら云つた、「こいつは偽志士にせです、追つぱらつておしまいなさい」

「偽志士……」太宰にはちよつとその意味がわからなかつた、「それは、しかし……」

「つまり尊攘派の志士という触れこみで食つて歩くやつです、宇都宮藩士だとか、脱藩して追われているとかいふのはみんな嘘つぱちのでたらめです」

三

「こいつには去年いちど高松で会っているんです」秀之進はつづけて云った、「そのときは仙台藩士だといっていました、ちよ
うど白石しろいしの者がいあわせたものでばけの皮が剥はげました、この
頃こういうやつが諸方へあらわれるからご注意を要しますよ」

「それは本当か」太宰よりさきに泉仙介がにじり出た、「おい、
きさまそれは事実か……」

鹿島金之助は蒼白あおしろくなつた面を伏せ、ぶるぶると戦おのく手で袴はかま
を掴つかんだまま黙っていた、それは紛れもなく罪を告白する姿だつ

た。

「事実だな」というと仙介は大剣へ手を伸ばした、「よし外へ出る、そんな者は生かしては置けぬ、斬つてやる、出る」

そうだ斬つてしまえと井上も叫んで立つた、襖ふすまの向うで聞いていたのであろう、そのとき幸子が「お待ち下さいませ」といいながら足早にはいつて来た。

「ようすはあらまし伺いました、女の身でさしでがましゆうはございますが、ご成敗……というのは少しいかがと存じます。恐れ入りますがわたくしに任せては頂けませんでしょうか、当家にも至らぬところがあつたのでございますから……」

そう云つて間へ割つてはいると、すばやく金之助を立たせ、巧

みにその座敷から伴^つれだしていった。こちらも本気で斬るつもりはなかつたのだろう、「こんど会つたら首を貫うぞ」とどなりつけたが、それ以上は追いかけてゆくようすもなかつた。

青年を別間へつれていった幸子は、そこで食事を出してやったが、かれは箸^{はし}をとらないで、「申しかねますがこれで結飯^{むすび}を作つて頂けませんか」と云つた、「結飯はべつに作つてあげますからこれはこれで召しあがれ」幸子はそう云つて、自分で厨へゆき、握り飯を作つて包んだ。どのような想いに責められているのだろう、かれは震える手で箸をとつたが、ほんの口を付けたというだけはやめた。幸子は黙つて見ていた、かれは幸子に見られることが堪えられぬようすで、結飯の包みを受取るとすぐ、「支度して

来ますから」と離れのほうへ立っていった。

幸子はあと片付けを命じておいて自分の部屋へはいり、手文庫から幾いくばく許かの金をとりだして紙に包んだ。元の室へいったが青年は戻っていないので、玄関へ出てみた、それから急ぎ足に離れへいった。灯の消えた暗い部屋の中には、一枚だけ開いている障子の隙間からひっそりと月がさしこんでいた。かの女は走るように戻って来ると、召使の者に客間へ食事を運ぶように云いおいて、自分はそのまま外へ出ていった。

結飯の支度をたのんだからには大津へ出るのではない、坂本から叡えいざん山へでもゆくつもりに違いない、幸子はそう信じてあとを追った。はたしてそうだった、もう霜がおりたとみえ、月光をそ

のままむすんだように、白く凍こっている道を小走りにゆくと、尾花川の細い流れを渡ったところで追いついた。「お待ちなさい」幸子がそう呼びかけると青年はちよつと逃げだしそうにした、けれどすぐに立ちどまった。

「わたくしのこころざしです」幸子は持つて来た金包みをかれの手に与えた、「今はなにも申上げません。もういちどお会いしましょう、……ようございますか、もういちど此処ここへ訪ねていらつしやるんですよ、誰にも恥じぬ人になって、……お約束しますよ」金包みを握ったままうなだれている青年は、いきなりよろめくように道の上へ坐った、そして腕で顔を掩おおつて泣きだした。幸子は手を伸ばしかけて止めた、……ほど近い尾花川の瀬音が、氷こる

ようにさむぎむと夜氣をふるわせている、くいしばった齒の間から、切々ともれる青年の慟哭どうこくのこえが、その瀬音に和していたましく耳にしみついた。

「云つてあげたいこともありますし、うかがいたいこともあります」幸子はやがてしずかにそう云つた、「けれどそれはこんどお眼にかかるときにしましょう。あなたはきつと御国のために役だつりつぱな武士におなりなさる、わたしはそう信じていますよ、……今夜の、その涙をお忘れにならないで、ようございませぬ」それだけ云うと、噎むせびあげている青年をあとに幸子はそつと踵くびすを返した。

家へ帰つて門をはいると、前庭のところに誰か立っていた。暗

いのでぎよつとしたが、すぐに良人だということがわかった。

「どこへいった」太宰は低いこえで訊いた、「鹿島を追つていったのか」

「はい、……」

「金を持たせてやったのだな」

幸子はもういちどはいと云つて俯向うつむいた、太宰は「あとで話がある」そう云い残して、さっさと家の中へはいつていった。

その夜かなり更けて、客たちが寢所へはいつてから幸子は良人に呼ばれた。小さな火桶ひおけを間にして、さし向いに坐ると、太宰はながいこと黙っていたが、やや暫くして「金はどれほどやったのか」と口を切った。

四

「勝手ではございますが十金さしあげました」「……おれにはわからない」太宰は酔の残っている顔をきゅつと歪めた、ゆが「どういうわけか、このところ来客に出す酒肴もみすぼらしいほど粗末になった、家内の食事は焼き味噌に菜漬だということも耳にする、……それほど^{つま}儉しくするおまえが、あのような^{かた}騙り者に十金という分に過ぎた金を呉れてやる、いったいこれはどういう意味なんだ」

「さしでた事を致しましてまことに申しわけがございません」幸

子はつつましく頭を垂れた、「今後はよく気をつけますゆえ、どうぞこのたびはおゆるし下さいまし」

「あやまれというのではない、どういう意味かを訊いているんだ」
太宰は苛だたしさを抑えつけるような調子で問い詰めた、「近頃の吝嗇とも思える仕方と今宵の十金とはどういう区別から出たのか、おれはそれが知りたいんだ」

「……あの若者を」と幸子は面を伏せたままようやく答えた、
「あのまま放してやってはいけなないと存じました、これまでは世を偽っていたかも知れませんが、偽るにしても攘夷倒幕を口にするほどですから、導きように依っては必ず同志のひとりになると存じます、……御国のためにはいまひとりでも多く、身命を

惜しまぬもののふが必要なときでございます」

凍てた道の上に坐つて、面を掩つて泣いていた青年の姿がまぎまぎと眼にうかぶ、あの涙だけは偽りではない、幸子にはそれが痛いほどもよくわかつていた。

「そのおなじ気持を」と太宰はさらに追求した、「……おなじ気持をこの家へ来る客たちに向けることはできないか、みんな家郷を棄^すて親兄弟を棄^すてて国事に身を捧^{ささ}げる人々だ、名も求めず栄達も望まず、王政復古の大業のために骨身を削る人々だ。できない事なら仕方がないが、幸いこの家にはそこばくの資産がある、たち寄る人々に、せめて心を慰めるだけの接待をするのは寧ろわれわれのつとめではないか、……ここへ来ると百日の労苦を忘れる、

あの人々がそう云うのを聞いた筈だ、鹿島に恵むその気持があるなら、どうしてこれまでどおりの接待ができないのか」

「わたくし、……できるだけ致しているつもりでございませうけれど、ふつつか者でございませうから……」

「言葉をくるんではいけない」太宰はするどく遮さへぎった、「……もうおまえもつずやはたちの若さではないんだ、云うべきことはつきり云うがいい、それに依つてはおれにも少し考えがある、今夜こそ本心を聞くぞ」

「そんなに仰せられましては、わたくしなんとお返辞を申上げてよいやらわかりませぬ、けれど、……」幸子はふかく頭を垂れ、ながいこと悲しげに自分の膝ひざをみつめていた、しかし「おれにも

考えがある」という良人の言葉はぬきさしならぬ意味をもっている。幸子はそのひと言で追い詰められるように思い、やがてしづかに語を継いだ、「……けれど達てのお言葉ゆえ申上げます。去年の極ごくげつ月はじめでございましたか、長州藩の広岡さまが二日ほどご滞在あそばしました」

「広岡せつは泊つた、それで……」

「わたくしおそばでご接待を致しましたが、お話がきんちゆうごしきび禁中御式きんちゆうごしきび微きのことに触れました」

幸子はその両手を畳へおろし、太宰は正坐して衿えりをただした。「かずかずおそれおおい事のなかに、……さる年のはじめ、御祝賀しえんの賜宴しえんに臨御あらせられた主しゅじょう上じょうには、御吸物の中より御箸

をもつて焼き豆腐をおとりはさみあそばされ、ことしの鶴はこれぞ、さよう仰せ下されましたと……」ぐつと喉のどへつきあげてくるものがあつて幸子はしばらく言葉がつづかなかつた、「……毎年、御佳例ごかれいの鶴の御吸物が、大膳職だいぜんしきにおいてどのようにも御調進奉ることがかなわず、申すもおそれおおき限りながら、焼き豆腐をもつて鶴にかえ奉つたとのことでございました。また、……さきごろ所司代酒井若狭守わかさのかみ（忠義ただよし）どのが参内いたし、おすべりとやら申上げまする、主上御箸つきの御膳部を賜わり、異例の光栄きょうに恐懼きょうくして頂戴仕りましたところ、鯛の焼物が腐つていて口にいれることができず、いかにやと心易き殿上人に訊ねましたら、……儀式として鯛はきまつたものながら大膳職の御経費に乏しき

ため鮮鯛まなだいを奉ることかなわず、主上にも御箸はつけたまわぬと
のこと……」

幸子は両手をついたまま嗚咽おえつをのんだ、太宰の膝に置いた手も
ぶるぶると顫ふるえた。雁かりがわたるのであろう、更けた夜空を高く啼な
き過ぎる声が聞えた。

「一いってんばんじょう天万乗の君にして、かくばかり御艱難ごかんなんをしのばせたも

う……広岡さまのお話を伺いながら、わたくしは身を寸断される
ようにおぼえました。国事に身を捧げる志士の方々、日夜の御辛
労はどれほどか、この家へおたち寄り下さるときくらいは、身に
かなうだけおもてなしをして、せめて一夜なりとも心からご慰勞
申したい、そう考えて至らぬながら酒肴の吟味もしてまいりまし

た、……けれども広岡さまのお話を伺いましたとき、『できるからする』という気持ちがゆるしがたい儼上せんじょうだということに気づきました。禁中におかせられてさえかくばかりの御艱難をしのばせられるおりから、下賤げせんのわれらが酒肴の吟味などは……口に
するだに恥じなければならぬことでございました。まして今は非常のときでございます、ひともわれも、できるだけつい費えをきりつめ、あらゆるものを捧げて王政復古の大業のお役にたてなければなりません。おこがましい申しようではございまいしょうけれど、わたくしそう存じまして……」

五

広岡晰の話は太宰もまざまざと記憶にある、そのとき身内に燃えあがった忿怒ふんぬの情も忘れない、だが今おなじことを妻の口から聞き、かれは骨を噛かみ砕かれるような悔恨にうたれた。

——禁中御式微のことを申上げながら、おのれらは酒をくらい美食を貪むさぼっていた。

その事実にはいかなる抗弁もゆるされない、志士であることは特権ではないのだ、寧ろどんな人間よりも謙虚に、起居をつつしみ、困苦欠乏とたたかかって、大業完遂の捨石にならなければならぬ筈だ。太宰は低く呻うめいた、……そして暫くは面があげられなかった。

「幸子、おれは明日ここを立つ」なにか心に期したというように、やがて太宰は妻をかえりみながら云つた、「こうして湖畔に安閑としているときではなかつた、明朝……泉たちといっしょに京へのぼる、これ以上はなにも云えない。さつきからの言葉は忘れて呉れ」

「わたくしこそ、おこがましいことを申し過しました、どうぞお聞きのがし下さいませ」

女の幸子でさえ、広岡の話を聞けばすぐ事実にうつして身をつつしむ、悲憤慷慨ひぶんこうがいに時を費やしているときではない、……そう云つては違ふかも知れない、今かれを奮起させたのはもつと本質的な情熱であろう、しかし人間が大きく飛躍する機会はいつも生

活の身近なことのなかにある、高遠な理想にとりつくよりも実際にはひと皿の焼き味噌のなかに真実を噛み当てるものだ。

「……弥五が鴨を持って来るかも知れない」太宰はしずかに微笑しながら、「濟まないがいいように云つて断わつて呉れ」

「いいえ」幸子も頬で笑つた、「せつかくお申付けになつたものですし、明朝お立ちあそばせば暫くはお帰りにもなれませんでしょう、久しぶりに手料理を致しますから……」

「しかし明日の朝では間にあうまい」

「もう夕刻に持つてまいりました」

それは弥五の手まわしがいいなど、太宰は呆れた^{あき}ように笑つたが、ふとかたちを改めて、「いやいかん」と首を振つた。

「鴨はよそ、
……」

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日2刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1944（昭和19）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2019年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本婦道記

尾花川

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>